

性に相應するものであり、かゝる型學が何等かの意義を有するものなることは否定出來まい。若し私に一言することを許されるならば第一には、社會的環境の意義即ち外圍の變化に伴ふ當核人格の變化を考察の一部に置く必要があり、若しアイデチケルの方面のみより解釋するならば、すべての心的なるものを本源的一局部に置かんとするものであり、かくては個體的特異性の全體を捉らへ得ざること、恰もフロイド派の學者が陥りつゝあると同一の錯誤に陥ることになるであらう。第二には、型の多様性は所詮相對論に陥り、切角原子論的考察を脱却せんとしながら、遂ひにその統一性を失ふに至り、古への能力心理學に歸向する道を聞くこと、ならう。かゝる問題は暫く措き、シュテルン教授の人格學が關與する問題としての意義と解釋構成と形態とを考察の中心に置くことは興味がないでもない。彼は心的作用の意義を二種に分ち第一には、如何なる目的によつてその作用が起るかの問題、第二には、その作用が如何なる表徴を當核人格の本質にとつてもつてゐるかとの問題に入らうとしてゐる。かゝる問題提出から考察するならば彼も亦現代心理學の波にもまれ、この行き方に悩む學者の一人であり、只だ如何にその問題を取扱ひ、如何にそれを解明して行くか、換言すれば、ストラクチュール乃至はゲシュタルトの考察の仕方によつて種々の方向が可能であり、種々の心理學が再び生れ出づべき道を示してゐる。

(三) 學者からの印象

四月二十日の夜——ベグリウスングスターベンダに出席して見ると可なり知らぬ顔が多いのに驚いた。老大家連を見廻して見るとシュウマン、アッハなどが特に目立つてゐた。伯林の連中が生憎、ルッブを除いては見えなかつたので、此處のパウリ教授を種々と煩した。アッハ教授は百年の知己に會つた様な様子にて、私共に必ずや、ゲッテンゲンに來るべきである。とさへいはれ、そして日本から來る連中が言葉が出来る様になる頃には歸つてしまうことは心理學を根本的に研究する上には残念の事であり、長くるて研究することが、最もよい道であると教へられた。アッハ教授に接する毎に、私は東洋的英雄の面影をありと認め、彼が各の講演毎にその獨特の態度にて質問し而して後進を導くの概には殊になつかしく思ふ。彼がケッテンゲン派の驍將として反應時の研究を土臺とし、いはば常に保守的の態度を持してゐることは彼の生命であり、ドイツ心理學の一つの特色たることを失はぬと思ふ。第三日目のライブチヒ派のフォルケルトの講演の後には、形態派の問題が可なり論争せられたが、アッハの態度は所詮想像通りだつた。彼のいふ所によると「戦前に於ける心理學の原子論的傾向は反省の後には種々の困難を持ち來すものではあつたらうが、然し實驗的の立場からは便宜なものであつたことは否定出來なからう。然るに今や形態的立場はドイツ心理學を

支配しようとしてゐる。自らは形態論の立場には立たぬが形態は一つのモーメントなることは認める。この點に錯覺を起してはいかぬ。心的生活にはこの外に種々のモーメントがある。意志のモーメントなどはこれに數へることが出来る」と。アッハ教授には度々接することが出来た。彼は別に講演をしなかつたが彼の率ゐる少壯の學者の講演が終ると取るものも取り敢へず歸つて行かれた。シューマン教授がオブチクの研究者として而も心理學雜誌の主幹の一人として、私共がその名を知つてからは久しいものであるが、彼も、とる年には争へず白髮の老大家の中に數へられてゐる。彼の種々なる勞作、殊にユウバーガングス、エルレブニスその他の主張によつて少壯者に種々の意味の興奮と指導とを與へたことは述ぶるまでもないが、彼がフランクフルト大學の設けられるに當つて、ケエラー、ゲルブ、ウエルトハイマー等の少壯學者を伴つて、こゝから現時のドイツ心理學に於ける一つの大きな波を作るべき動機を與へたことは彼の貢獻した最も大きなものの一と思へるであらう。シューマンのいふところによると、『日本の心理學は餘りにブラクチックシユになつてゐる様に思ふが心理學は尙ほブラクチックシユの時代でない。理論的實驗的に研究しないと發達は望まれぬ』との事であつた。マルベ、ゼンマー等は豫想通り、既に老大家、シユトウンプ教授は四月二十一日が七十七の誕生日にて、ベッヘル教授は當日、開會の辭に當つて、これの祝辭を述べられた。ベッ

ヘル教授は第一には出席せる學者に對し、尙ほ、フリーバー、ウエツェル、パウリ等の努力に對し感謝し、第二には種々の心理學の傾向及び個々の勞作的統一を形作ること、恰も一つの生活體の個々の細胞が有意的の交互作用に於て、ある全體を形成するごとくならんことを望み、第三には、シユトウンプに對する祝辭をもつて結ばれた。學者らしい學者、學會にて老大家中最も重きをなす學者、七十七歳の今日、伯林の實驗室にて音聲分析の實驗を繼續せる研究者、而も摯實に弟子の指導に盡した現代最も有望なる學者たるシユトウンプは、吃りながら、而も力強く、この祝辭に感謝し、併せて心理學が他の種々の科學に關聯のあることを指摘し、且つ正にドイツ國が心理學の發展に大いに與つたことを強調せられた。シユテルン教授も心持ちよい老學者、ミユラー教授は主催者ではあつたが病氣のために出席せられなかつた。

私は種々の講演著作、印象その他によつて、強ひてドイツ心理學に與る學者を三期に分つて見よう。第一は、老大家の列に入れられるもの、即ちシューマン、アッハ、ミユラー、シユトウンプ、マルベ、ゼンマー、シユテルン、シユテリリング等であり、第二は、活動盛りの學者の列に入れ得るもの、即ち三十七八歳から五十歳位と思はれる連中で、第三は、三十歳前後から三十五六歳位の少壯の而も未知の連中である。勿論、この年齢は一寸知り得ないから、只印象から大體に述べよう。

第二の群の中には、クリューゲル、ヴィルト、カッツ、コフカ(缺)ケエラー(缺)、ウエルトハイマー(缺)、ゲルブ、フォルケルト、ルツ、イエンシュ、リンドボルスキー、グリュンバウム、ルビン、ゴールドシユタインなど數へれば數限りない。缺席せる連中を除いて私にこの學會中、最も印象を残したものはカッツ、ゲルブ及びルビンであつた。

カッツ教授には著作によつて可なり私は影響を受けてゐたし、ゲッチンゲン大學の出した俊才として可なりその研究には尊敬を持つてゐた。彼の研究は常に新しい境地の開拓に向ふものであるとの考へ方を持つてゐるが會つて見ると尙ほ、その考へを強めた。私共の宿した家にゐられたので殊に親しくして戴いた。彼は嘗ては數學を研究し中途より心理學に向はれた人である。東洋方面に可なりの趣味を有し、その夫人も殊に感じのよい人だつた。彼の行つた講演も彼の從來の勞作も學會中常に波を引き起した。その質問振答辯振も明快であり學界中の重きをなす一人であつた。ゲルブ教授に就ては既に幾度か述べたことがあつたと思ふが彼も伯林大學が生んだ俊才の一人、古くは伯林ではコンブリカチオンス、メトードを用ひて種々の實驗的研究を行つてゐられたのだが、誰も知る如く彼の勞作は心理學雜誌に引き續いて發表されてゐる。殊に關係知覺の考想到シユトウンプの流れを汲んでヘフラーと論争し、近年は空間知覺殊に視覺現象の問題に没頭し病的現象と關聯して種々の興味深い

研究を發表してゐることは述べるまでもない。フランクフルト大學が現代ドイツ心理學の流れに重大なる意味を有してゐることは誰も見逃し得ない事實だが、殊に私はこの中でもゲルブ及びその下に研究した例のフックスの研究には盡きせぬ興味を抱かすにはゐられない。若し伯林派のヴェルトハイマー、ケエラーの考想到裏付ける大なる研究を求めらば私は第一にこの兩人の研究を挙げ得るとさへ考へてゐる。ゲルブは、人のよささうな、四十位に見える元氣のよい研究家である。外見一寸銳利にも見へぬルビンがそして、一寸人よりも異つた頭髪を作らしてゐる彼が外國訛りの而も得意の雄辯をもつて新境地の開拓を叫びつゝ、あることは、私には一つの驚異であつた。彼の研究は從來私共の認めるが如く他の研究家に一歩常に先んじ従つてこの意味に於て、私は多くの學者中、多大の尊敬を拂はずにはゐられぬ一人で、今度彼が提出した問題も亦、一般の注意を集めた。殊にゲ・エ・ミユラーの學說に對するケエラーの批評が發表されてからまもなく彼が實驗的研究を發表したのであるから將來の方向を暗示せずにはゐない。

學會中の名物男、而もその勞作の數量に於て、その特異の雄辯に於て、論戰を好んで行ふことに於て、多くの學者中、一等地を抜けるものは、マールブルヒのイエンシュなることは誰も否定し得ないであらう。彼は、ゲ・エ・ミユラーの高弟としてゲッチンゲン派の雄將、而も、近年、既に、早

くミュラーより脱出し自家の世界を建設しようとして努力しつゝあるもの、空間知覺の研究に於て、將又彼の所謂直觀像の現象に於て自は獨特の世界の發見として高弟クローと共に獅子吼しつゝある。アイデチケルの問題が如何なる意味と價值とを有するかは、今私の述べようとするところではないが論題の一つとして残されてゐることだけは事實である。彼の勞作の多くが示すが如く、彼はやゝもすると論理の飛躍を行ふの癖を脱し得ない。若し例へば彼の行つた空間知覺の實驗を反覆し、そしてそれに表現された考想を吟味するならば恐らく種々の問題が續出することを驚かすにはゐられまい。それほど彼は種々の豫想を持つてをり、その假定を信奉して自己の世界を開拓しようとするの勇氣を缺いてゐない。彼がアイデチケルに對する興味から所詮、型の問題に興味をもつてをり、換言すれば教育心理の問題に接近してゐることは忘れることは出来ない。彼が將來如何なる點まで發展し得るか、それは問題の一つでなければならぬ。嘗て二年前私共がマールブルヒに彼の研究室を訪ふた折、私が受けた印象は極めて親切な、下にも置かぬ應待振であつたことを忘れることが出来ぬ。これと逆に二度目にあつた折の態度はアッハ、シューマン等の何時も變らぬ様子に對して見ると物足らぬ思ひがないでもない。

ライプチヒ派のクリューゲルがヴントの後繼者として殊に外國の心理學者から種々の期

待を持たれ發達心理學の旗幟を立てて、以來年久しきに涉つた。彼の形態質論が、コルネリウスに結合して、伯林派、ゲッチンゲン派に對立してゐることはいふまでもない。彼の門下にあつて而も彼を助け、彼を重きに導くものはハーフォルケルトであるといひたい。彼の研究は人を魅するの華かさを持つてゐない。然し贊賞はるを失はない。彼の提出する問題は新しいものではない。然し彼が四十代の人を持つ、落ちつきをもつて一歩々々、目ざす世界に向ひつゝあることは誰も認めないではゐないだらう。彼が實驗兒童心理學の進歩に關して行つた講演は種々の論點を除いて見れば興味深い暗示に富んだものであつたことを喜ぶもの一人である。

グリウンバウムの名は種々の引用されたものによつて私に疑問の學者としての残つてゐたもの一人であつた。小柄な而も肥大して、何時も天井を眺めながら黄な音色で論じ出されるのを忘れて彼の説く世界に引き入れられてしまふ様に感じた。彼の行つた講演から察して面白い研究家たるを失はぬと思はせられた。彼はキユルペ派の人である。リンドボルスキーは何時だつたか伯林の私の實驗室を參觀せられ、佐久間君と私とを混同せられたことがあるので、親しい顔の一人であつた。彼は一見温厚の君子人たるの觀がある。従つて別に新天地に逍遙する人ではないが、然し新しい傾向をも相當に理解し尊重する學者であ

る。彼の著者は私共には新しい理解に導くには物足らぬ思がないでもなかつたが、然し見逃し得ない研究家たるを失はぬ。フリーベスと共に彼はカソリックの人殊に私共が忘れてはならぬことはドイツ心理學の一方面に可なり多くのカソリックの人々があることである。この學會にも十數人のカソリックの人々が出席してゐる。嘗てその著によつて知つてゐてエントトイシェンされてしまつたマーゲルもミュンヘンにて研究しつゝあるカソリックの人の様である。ゴールドシュタイン教授はケセラ、ウェルトハイマー等と共にフォルシュングの主幹の一人である。ゲルプと共に變態現象を普通心的現象に極めて重大なる關係があるとの考想から從來種々の研究を見ることが出来たのであるが、鋭利なる研究家の一人であつてこの方面の權威たるを失はぬと思ふ。

只一人のヴンチアンといはれるかのヴィルトも人のよい學者であつた。私は從來彼の研究を繙く毎に直面目なる研究家であるが、少し展開してほしいものであるとさへ思はないではなかつた。彼の行つた講演から察して、私は可なり組織化の方向に向ひ而も餘りに限定せられた細い特殊の世界に逍遙してゐることを認めないではゐられない。ミュンヘンからの歸途私は汽車に乗り遅れ、レーゲンスブルクに古代の面影をしのび、一人次の列車に乗ると偶然にもヴィルト教授と同車することとなつた。彼は十數年前松本先生御留學の當時か

ら塚原校長その他の先輩の様子を回想しながら、私共五人の誰も知らなかつたことをいかにも残念であるかの様子に物語られたが、私共が松本先生の門下であることを知つて急に、元氣づいて話は種々の問題に飛んで時の移るを忘れることが出来た。近來宗教心理の問題にも興味を有すること、そして反應時の研究を整理したきことなどは彼の有する念願の一つであつた。嘗て私は誰からかヴィルトの秀才であることを聞かされたことがある。而も二十三歳で彼の意識現象の著書を書いたとのことを聞いて、遙に如何なる人であるかに興味を持つてゐたものの一人である。然し直接接して見ると既にこの面影はない。彼の講演にのぞんで見ると氣の毒なほど聴者が少い。而も意識現象の出来たのは彼の三十三歳前後であるさうである。勿論、何時出来たかは問題でない。只從來ヴントだけが一人の心理學者であつて、而もその後、ドイツ心理學がヴィルト、クリューゲルなどだけによつて支へられ、没落に赴いたと考へることは何よりの誤解であるといひたい。從來ヴントはドイツ國內よりも外國、殊にアメリカ、日本に於て高く評價されてゐたことは事實らしい。何故に、さうなつたか、一つにはヴント派の弟子が外國人が多いことにもよらう。例へばヴントの第一期の助手はカツテルであり、ティチエナー等もさうである。數へれば數限りがなからう。二つにはヴントの心理學は組織整然たるものであり、たゞ紹介しとり入れるがためには便宜なものであつたかもし

れぬ。しかし考へて見るとこの手早い組織化にこそ種々の問題が横はり、従つて偏頗極まる方向をとつたことも考へられぬでもなからう。私はこの點には可なり興味をもつてをり、現代各派の人々に接する毎にヴントに關する評價の度を尋ねて見たことがある。それによつて見ると、現代ヴント派なるものがないことは事實であり、而もヴントが種々の意味に於て刺戟を與へたことは否定出來ぬが、最初からヴントだけが大きな心理學者ではなかつたとのことである。比較的生命を有するものと思つてゐた彼の民族心理學の研究さへ餘り重く顧みられてゐないのを知つて見ると種々の感慨に打たれずにはゐられぬ。外國に研究するものが生かぢりの理解によつて只紹介を事とすることは甚しいものであると思ふと共に將來は出來るだけこの點に注意して若し紹介する必要があるなら種々の方面に着眼することを忘れぬ様にしたいものであるといひたい。

廣漠なる心理學の範圍に濶歩し獨自の雄辯を有し、一方の重きをなすものウィーンのカール・ビュラーその人である。彼の立場は伯林派に接近し、これに同情を有する學者であることは彼の從來の著書によつてもこれを知ることが出來ると思ふが、自分にとつては謎の學者の一人であつた。何故かといへば彼の著書を見れば極めて細かく、あるものは極めて粗笨であると思はれたからである。謎として残りつゝも自分は彼から種々の考想を受け、一度

は彼の門を叩かばやと思つてゐた人であつた。殊に從來本能説を唱へ、これを一つの問題とする彼からそれに關するものを聴くことが出來るのは何よりの楽しみの一つであつた。然しその内容と考想とから自分の眼に映つた彼は既に下り阪の學者である様にも思へた。然し自分はビュラーが從來私共に與へた種々の考想と暗示とを否定するものではない。

第三の群即ち最も若い學者を擧げるとは私にとつて最も困難な一つである。例へばウエルネル、レビン(缺)、アレシユ、パウリ、カトナなど強ひて求めれば、ないこともない。然し私はこれ等の人々、その他の若い學者に就て書くことは避けたい。何故かといへばこれ等を書くことによつて他の人々を見逃す恐れが多いからである。勿論、私が直接接し得ない學者中にも又接した學者中にも、この外種々の學者があることを認める。

學界全體の氣分から見ると、現代ドイツの心理學には異つた傾向が相争ひつつ進行しつゝある様に思ふ。一つには、新傾向に立つてゐるもの、二つには、舊傾向に立つてゐるもの、新傾向に立つてゐるもの、中にも例へばライプチヒ派、伯林、フランクフルト、ギーセン派及びゲツチンゲン派があり、舊傾向もこれに錯綜して存在してゐることである。

應用心理學の方面、殊に精神工學と稱するもの乃至はテスト的研究に關しては議論、區々の様に思ふ。日本で殊に有名になつてゐる様に思ふメーデ流の方向は如何なる意味をもつて

ゐるかは疑問とされ、一般に専門的學者からは顧みられてゐない、應用方面で重きをなすものはシュテルン、マルベ、ピオロコウスキー、ルツプ、ギーゼ、リップマン等であるかもしれぬ。心理學の應用にも種々の方面がある。勿論その範囲内に於ては意味を持ち理論的實驗的方面の展開にはどうしても顧慮すべきものなることは論ずるまでもないが、これを餘りに誇大視し而してこれを全然盲目的に信仰して理論的研究を忘れることは如何かと思はれる。私が種々の問題に關して受けた印象の中で大なるものはこれであつた。心理學の研究に限らず一般に學者が各の世界を持つてゐることは何より尊いことであると思ふ。若しさうでなかつたならば、必ずや流行を追ふことに終つてしまふであらう。流行を追ひ、そして自家の考想を持たぬ學界は他人の學説を論評することよりも、その誤譯を指摘して苦笑する位が關の山となるかもしれぬ。そこに、どうしてよいものが生れてくるであらうか。我が學界が學ぶべき點は多々あることと思ふが、ドイツ心理學の各派の學者が、何れも自己の研究と弟子の指導とにそのエネルギーを集中し而して衣鉢を傳へることに熱心である様に思はれる點である。従來、我が國が學者なる概念の下にもつてゐたものは、恐らく種々の要素もあつたらうが、外國の學者の説を生かぢりに廣く知り、これを紹介することの出来るといふ點に可なり重味を置いてはゐなかつたらうか。勿論、これらの點も或時代には重要であつたかもしれぬ。が併し、

もうその時代は過ぎやうとしてゐる。かゝる學者の概念の下には所詮、流行物を追ふ心理が根ざしてゐよう。かういふ様な印象から、私はドイツの心理學の將來の展開には可なりの期待を持つことが出来ると思ふ。

(日本心理學雜誌第三卷所載)

『附記』 この文は私が在獨當時、東大心理學教室へ宛てた書簡中より採録され、同教室に於て、同封して置いた講演題目を添加せられて發表されたものである、今から見ると思ひ誤つてゐる節がないこともないが、一時期を記念する意味に於て附録として置く次第である。

生活斷片

あるひふと、お獅子となりて、吾子^{あこ}たけり、われ思はずも、囃してありぬ。

第九編 エリヒ・ベツヘル教授の思出

最近獨逸心理學界は隠れた一つの勢力であつた慈父の様なベツヘル教授を失つた。

彼の學者的生涯は格別天才的の面影はなく、始めから終りまで、或は平凡であつたかもしれない。然し、彼がベノ・エルドマンの門下の驍將として、既に早くからボン大學で哲學や心理學的問題の外に、數學、自然科學の諸問題に興味を持ち、これらから得た深き洞察が倦まない彼の努力によつて、徐々に培はれながら、具體的問題として吾々に示唆を與へたことは少くなかつた。

彼は千八百八十二年ラインスハーゲンで生れ、千九百七年には既に母校ボン大學の私講師となり、千九百九年にはミュンスタール大學の正教授として拔擢され、千九百十六年には、嘗てリッブスやシュトウンブがゐたミュンヘン大學に轉じて引續き心理學や、その他の哲學上の問題に就て講じてゐた。

ミュンヘン大學の心理學が現今の状態にまで發展するには勿論それ以前の傳統もないではないが、主として彼及び彼の門下の業績に負ふといはねばなるまい。

現今ドイツに於ける實驗心理學の中心は勿論各地にも散在するが、何といつてもベルリンを除いてはライプチヒ、ハンブルグ、ミュンヘン、フランクフルト、マールブルク、エナ等を擧げねばなるまい。こはらの中でもフランクフルトとミュンヘンとはそれぞれ特殊の領域を持つて新しい試みをなしつゝある所である。フランクフルトは最近、伯林のウエルトハイマー教授を迎へ、その特色とする病的心理學に於ては、益々その強味を加へたのに反して、ミュンヘンがベツヘル教授を失つて將來如何なる方向を特色とするかを考へて見ると心細く感ぜられぬでもない。

ベツヘルの業績は數多いが、中でも心理學的著書ともいふべきものは、何といつても『**脳髓と精神**』——千九百十一年版であらう。

恩師ベノ・エルドマンに捧げたこの書に於て、彼は肉體と精神との問題に没頭し、殊にエルドマンに暗示せられたフオン・クリースの『意識現象の物質的基礎』に就て——千九百〇一年』の中に表現せられた思想の影響を受け、こゝから更に精神現象の生理的解明の問題に立ち入つて、從來やゝもすると考へられたやうな生理的記憶説とも稱すべき興奮殘餘説と神經消耗説との不徹底を難じて、こゝに機能的順應の概念を持ち來り、更に進んでは記憶の本質を考へようとして形態の心理的意義にまで及んでゐる。

かゝる考想の暗示を彼に與へたものは現今の形態派的思想の失驅をなす流に外ならない。例へばヴントの創造的綜合、マイノングの基底上内容、エーレンフェルスの形態質等の概念はそれぞれ異つた陰影を持つものではあるが、何れも彼の思想の中に融け込んで記憶に對する形態の意味を考へしめ、遂には心理的記憶假説を建設しようとする努力を生ましめてゐる。

如上の考へに近い思想を、彼は屢々彼の論文に表現し(例へば Archiv für gesamte Psy. XXXV. 125) てるが、恐らく彼の心理學的、生理學的、物理學的、神經病理學的、教養と素質とが與つて力があるといへよう。

彼は然し、各種の問題を論ずる場合にあたつて、他の學者に見られるやうな頑固さは少い例へば、彼はその思想の初期に於ては、フエヒナー、ベノー・エルドマンの感化の下に機械的自然觀を抱き、身心の問題に就ては、寧ろ並行論を支持した。生氣論の驍將ドウリーシュ教授の論難に對しては力強く並行論を辯護したのである。

然るに、その思想が徐々に動めいてエネルギー恒存法則が身心交互作用を決して除外するものでないことを認め、のみならず、精神の構造が腦の構造と根本的に異るといふ事實から凡ての並行論の形式が不徹底であると考へるやうになつて來た。

若し今、身體的過程と精神的過程との結合を認めるならば、この兩者は一種の因果的關係に

立つといへる、只、彼は精神的のものが腦に於て指導的位置を保つてゐるのみでなく、有機體の全般に涉つて支配的位置をとつてゐると考へた、この考想は心的記憶假説に最も適切に表現され、概してこれをいへば、交互作用説と並行論との調和を意味し、一種の精神的生氣論の立場であるともいはれる。『腦髓及び精神』に次いで、彼は感情の研究に志してゐる、これらの研究は主として雑誌、アルキヴ誌上に公表せられ(例へば Archiv für gesamte Psychologie XV. 356.

Sensibilität der inneren Organe の如き若しくは同 XXXIV. 189. Schmerzqualitäten の如きそれである) 快、不快をもつて他の感情と根本的に異なる意識要素と考へ、殊にその非無記性をもつて、意志生活に對する重要な意義を認め、全有機體に對する特殊の關係を見ることを忘れてゐない。

心理學上ベツヘルの勞作を通覽すると、その各部分に妥協的折衷的の試みが見られるが、この傾向は例へば、千九百二十一年に永眠したベノー・エルドマンに再び捧げた論文『ケエラー氏の形態知覺の基礎なる生理的過程の物理的學說』 Zeitschrift für Psychologie Bd. 87. 1921. の中にも明瞭に表現されてゐるともいはれよう、この論文はケエラー教授の物理的形態論の論旨を解明し、これにベツヘルの持つ化學的素養をとり入れて紹介したものにすぎない。

さて、ベツヘルの心理學的業績を見るがためには、彼が持つてゐた哲學の中心問題に觸れねばなるまい。

否、彼の中樞的傾向はこれらの方面に寧ろ横はつてゐたとも考へられるからである、彼はこの方面に於て自然哲學乃至認識論としての形而上學的色彩を多分に持つてゐた。

ベツヘルによれば科學は二つの群に分れる、理想科學と實在科學とがこれである、理想的對象はフツセル等の考想と異つて、思考内容として存在するに反して實在的對象は考へられることとは全く無關係に存在する。

彼はその青年時代の作『精密自然科學の哲學的假定一九〇六』に於て、その最初の敘述をなし、これを『自然哲學(現代の文化中一九一四)』の中に於て更に展開し、遂には『精神科學と自然科學(一九二二)』に至つて一般認識論の基礎に立つて實在科學の分節を企てようとした。實在科學の基礎的認識手段としての知覺の外に、こゝに尙ほ三個の認識手段を認め、曰く、回想、曰く、類比歸納推理、曰く、假説構成これである。

かくて實在科學の分類は、第一に、その對象によつて、第二にその用ゐられる方法によつて、第三に、その認識上の基礎によつて、行はれる必要があり、かうして爲された分類こそは、科學の持つ本質に適ふものである。

この考への下に生れたのが即ち實在科學としての精神科學と自然科學との分類である。勿論心理學は自己知覺といふ手段を基礎とし、自己知覺は心的事實の存在を確立するのみな

らず、現象的の本質直觀乃至は理想的存在をも知らしめるものであるから、心理學は所詮精神科學の中に配さるべきものであることはいふまでもない。

リツケルトの所謂個別化的、普遍的の區分は、不徹底であつて、凡ての科學の分類には適切でない例へば言語學、經濟學の様にその中に歴史科學としての性質を持つものも純粹に個別化的ではなく、又、自然科學の中でも地理學乃至は天體研究の様な部分には普遍的性質を缺くと見られる部分も少くない。

ベツヘルにとつては法則定立的(Nomothetisch)乃至個性記述的(Idiographisch)の對立を止揚して規則性一般の存否が寧ろ重大なる問題として考へられたのである。

即ち彼は規則性は存在しないか否かの問題を提示し、かくて實在的法則を二種に分つた。

(一) は共存の法則であり例へば物質恒存則の如きそれであり(二)は繼起の法則即ち變化交替生滅に關する法則である。こゝに彼は靜的電氣自然觀の考想を結合せしめ、即ち世界成分要素としてのエレクトロン概念をもち來つて實體概念としての成分要素は物概念の發展と考へ、その基礎成分の種類の恒存を信じてこゝに規則性の確立を認めようとした、やゝもすると見られる様な機能概念を普遍的と考へ、凡ての因果をこれに還元しようとするのはベツヘルに依つては阻まれてゐる、却つて因果法則と對立的に他の法則を見ようとするのが、彼の

思想に見られる。

何れにしても、法則性が、凡ての實在科學に適用せられ、こゝに自由意思論の立場は否定せられてゐるのである。

彼は然し、外界世界の問題一般に關しては批判的實在論の立場を支持し、外界は吾々の感官が示す様に完全になつてはゐない、只、外界の形式、殊に、その法則性が認識せられ、質的内容は充分に認識せられるとはいへない。

かくて認識論上に築かるゝ形而上學は決して、個々の科學の單なる結果とはなり得ない。

先きにも見たやうにベツヘル自身は精神生氣論又は精神活力論の立場であつて超個體的聯關を假定し既に植物にも超個體的な世界力の存することを論じ (Die fremddienliche Zweckmässigkeit der Pflanzenzellen 1917, Leipzig) 有機界に往々存する不調和は超個體的な精神が個體に入り來つてこれを複雑化し、これが爲めに發生せるものであるとする。

この様な思想を持つたればこそ、例へば、汎心理學の問題殊にオリバー・ロッヂ (Oliver Lodge) の靈的假説にさへ理解を示し、この點に於て、それ自身存在するものは精神的性質を持つと考へるロッヂエ、フエヒネル等の所謂精神的一元論にも程遠からぬものであるともいへるであらう。

彼によれば形而上學は自然科學乃至精神科學と共に、實在科學の一部分を構成しそこに用ゐられる方法は歸納演繹の兩方法の結合であるが、これによつて世界の根源を直接に直観するか否かは彼の未だ觸れざる問題の一つである。

自然哲學の體系に於ては、彼は認識論に基礎づけを求め、矛盾を除き、全自然形象を作らうとし、事實的にこれを表明しようとしてゐる。

彼に於ては、實在界の本質起源が問題となるのみならず、その向ふ目標が重大なる意味を持ち、こゝに所謂一定の目標に志向する世界形象が豫想せられる、勿論この場合にあつても物質精神を別箇の具體界とする二元論的思想は廢棄せられ、こゝに心的要因の指導的位置が徹底され、かくて精神的自然目的論が明瞭なる形式で表現されてゐるといへる。

以上考へて來たベツヘルの思想を培ふに與つて力あつたものは彼の早き時代よりの倫理學的問題に對する興味であることを忘れてはならない。

倫理學的問題の系統からいへば、ジョン・スチュアルト・ミルの影響を蒙り、最大多數の最大の幸福をモットーとして出發した。その著『倫理學の基本問題一九〇七』、『ダーニニズムと社會倫理學一九〇九』及びその外の部分にその片鱗が見られる。然し彼の功利説は人間愛に基礎づけられたものであり、精神的評價を強調し、只精神的なるものだけ價值ありとし、道義的に

價值あることは直接的に價值ある精神内容を世間に増加する傾向を持つ意志に外ならない、この意志に萬人の幸福が存在し従つて萬人の理想に個人は仕へねばならない、思ふに英國思想家のやゝもすると陥り勝ちである一つの弱點は心理主義的色彩の濃厚である點であらう、ベツヘルはこの弱點を出来る限り避けんことを努め、却つてその反對の弱點を持つに至つてゐることは閑却出来ない。さてベツヘルの倫理上の理想は萬人に仕ふるにあるから、これに關聯する主要問題は教育にあると考へられる。然らば教育の理想とする所は何か、彼の思想によれば理性によつて誘導せられた愛にこれを求めようとしてゐる。

教育の問題もベツヘルには興味があつた一つの世界であつた、ベツヘルは、ミルによつて社會問題は倫理乃至教育に關係あることを知り、殊に教育に關する方面多大であることを認め、屢々、教育の問題をも論じた、蓋し既にミュンスタール大學に於ては實驗教育學の先驅者の一人であつたエルンスト・モイマン教授の後を襲うたことによつても彼がこの方面に於て如何に興味を持つてゐたかも知像されるであらう。

嗚呼、多方面に活躍して更に尙ほ將來をも持つと想像せられた、ベツヘル教授は五十歳にもならず永眠された。私は彼に直接遭つたのは僅か數度に過ぎないが人として深い印象を残した學者の一人である。恐らく彼は古都に近い靜寂の中に精神と腦髓との問題や規則性一

般の問題の未解決をも忘れて眠られてゐることであらう。

残されたパウリ以下ミュンヘン教室の學徒や自然科学を中心として哲學的勞作にも耽る

エス・ベツヘル等の健在と活動とを期待しつつ、筆を擱く。(一九二九、五一—四)

エリヒ・ベツヘル教授著作

- (1) Philos. Voraussetzungen d. exakten Naturwissenschaften LPZ. 1907.
- (2) D. Gesetz v. d. Erhaltung d. Energie u. d. Annahme einer Wechselwirkung Leib u. Seele. Zeitschr. f. Psychol. 46. 1907.
- (3) Energieerhaltg. u. Psychophys. Wechsel-wirkg. Zeitschr. f. Psychol. 48. 1909.
- (4) D. Grundfrage d. Ethik. Köln 1908.
- (5) D. Darwinismus u. d. soziale Ethik. LPZ. 1909.
- (6) Gehirn und Seele. Hdlg. 1911.
- (7) Ueber Handlungsreaktionen u. ihre Bedeutg. f. d. Verständnis d. Organ. Zweckmäßigkeit Scientia Riv. di Scientia 8. 1910.
- (8) Theoretische Beiträge Zum Darwinismus. 1910.
- (9) Leben und Besetzung. LPZ. 1912.

- (10) Leben und Seele: Deutsche Rundschau. 1912.
- (11) Naturphilosophie (=D. Kult. d. Gegenw. III VII I). LPZ. 1912.
- (12) Ueber Physiologische u. Psychistische Gedächtnishypothesen. Archiv. 35. 1916.
- (13) D. fremddienliche Zweckmässigkeit der Pflanzengalhen. LPZ. 1917.
- (14) Geisteswissenschaften u. Naturwissenschaften. München. 1921.
- (15) Selbstarstellung; in d. deutsche Ph. d. Gegenw. LPZ. 1921 Bde.
- (15) W. Köhlers Physikalische Theorie der Physiologischen Vorgänge, die der Gestaltwahrnehmung Zugrunde liegen. Z. f. Psychol Bd. 87. 1921.

(心理學研究第四卷所載)

正誤表

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
二	一一	自ら	自から	一三一	七	ジョンヌアトミル	ジョンヌアトミル
三	七	意味さない	意味しない	一三四	六	背景	背景
一四	九	所謂圖形的性質	所謂圖形的性質	一三六	一	脊面	脊面
二〇	一三	ゆる	教ふる	一三七	四	輪廊的	輪廊的
三二	七	見做され	看做され	一三五	上欄柱	論問題	論問題
四六	一	切實と	切實に	一五八	上欄柱	第七編音空間の諸問題	最近心の諸問題
五七	六	關接	間接			理學的基本的諸問題	
六〇	一三	同じである	同じである	一七一	上欄柱	ミュンヘンに於る	ミュンヘンに於る
一一二	八	更に。	更に。	一八六	上欄柱	基本的諸問題	基本的諸問題
一二〇	六	春景	背景	一九〇	六	切角	折角
一二五	二	轉期	轉機	一九七	二	伯林派	伯林派
一二九	上欄柱	所感一束	所感一束		四	贊賞はるを	贊賞たるを
一三〇	五	脊面	背。面		上欄柱	第九回	第九回
一三〇	一〇	區別	區別。	一九八	一一	直面目	真。面目
一三一	六	教ゆる	教ふる	二〇五	三	こはらの中でも	これらの中でも



昭和五年九月五日印刷
昭和五年九月十日發行

最近心理學之基礎的諸問題

著作權
所有

著者	發行者	印刷者	印刷所
小野島右左雄	中村時之助	新井修平	電新堂
	東京市牛込區辨天町一七四番地	東京市京橋區木挽町二丁目十三番地	東京市京橋區木挽町二丁目十三番地

定價金貳圓



發行所

東京市牛込區辨天町一七四番地

中文館書店

電話牛込三三二五番
振替東京三八四二七番



廣島文理科大学教授
文學博士ドクトル
久保良英先生著

兒童研究所紀要

合輯 31
42

版四

洋裝背皮天金
紙數二〇〇頁
挿畫二〇〇頁
定價金九圓五拾錢
送料金五拾四錢

學術界教育界、等しく眞價を認め、今や本書の研究を語るの資格なき迄に激賞する。此處に四卷分を合輯す。

廣島文理科大学教授
文學博士ドクトル
久保良英先生著

兒童研究所紀要

合輯 75
6

版再

洋裝背皮天金
紙數一二五〇頁
挿畫二〇〇頁
定價金五拾四錢
送料金五拾四錢

本邦唯一の施設本研究の紀要の價値は絶對無二その内容の喋々を要せず、敢て必讀せられん事を切望す。

廣島文理科大学教授
文學博士ドクトル
久保良英先生著

兒童研究所紀要

合輯 98
108

版新

洋裝背皮天金
紙數二〇〇〇頁
挿畫二〇〇〇頁
定價金拾圓五拾錢
送料金五拾四錢

久保博士等同好の士が私財を投じて設立せられたる本研究所の貴重なる研究の發表は、恒に威たり。

廣島文理科大学教授
文學博士ドクトル
久保良英先生著

兒童研究所紀要

七卷

版再

大紙數一四〇〇頁
挿畫一四〇〇頁
定價金四圓五拾錢
送料金拾八錢

現今盛んに行はれつ、あるメンタルテスト、十有餘種の歴史發達、及現況を敘し、その實際の概を批判研究したるもの。

廣島文理科大学教授
文學博士ドクトル
久保良英先生著

兒童研究所紀要

八卷

版再

大紙數約四〇〇頁
挿畫一〇〇〇頁
定價金四圓五拾錢
送料金拾八錢

その眞摯なる發表に依つて兒童研究の紀要の眞價は學界に既に認識せられつ、ある所を至重要な研究は學界の至寶たり。

廣島文理科大学教授
文學博士ドクトル
久保良英先生著

兒童研究所紀要

九卷

版再

大紙數三三〇頁
挿畫六十有餘
定價金參圓八拾錢
送料金拾八錢

久保良英先生の兒童研究所の研究報告は、曾て歐米にも見ざる我が學界の金字塔として、現代教育の根柢を爲して居るのである。

廣島文理科大学教授
文學博士ドクトル
久保良英先生著

兒童研究所紀要

十卷

版新

大紙數六十餘
挿畫四圓五拾錢
定價金四圓五拾錢
送料金拾錢

久保、福富、關、桐原、守田等兒童研究權威者の貴重なる研究諸論文を、概む、現代教育の根柢的權威、教育家の最新智囊たり。

廣島文理科大学教授
文學博士ドクトル
久保良英先生著

兒童研究所紀要

十二卷

版新

大紙數百二十餘
挿畫百二十餘
定價金參圓五拾錢
送料金拾八錢

將來の國家を構成すべき兒童を心理的、生理的方面、純粹なる學理的立場より研究す。學界に推獎せらるゝの書。

廣島文理科大学教授
文學博士ドクトル
久保良英先生著

兒童研究所紀要

十二卷

版新

大紙數三百二十頁
挿畫百二十餘
定價金參圓五拾錢
送料金拾五錢

久保、桐原、迫田、内田、小林、増田、濱野諸先生方の兒童研究の貴重な諸論文を滿載す。

廣島文理科大学教授
文學博士ドクトル
久保良英先生著

實驗心理學精義

簡單なる行動篇

版三

菊判全一冊洋裝
紙數八〇〇頁
定價金六圓
送料金貳拾七錢

複雑なる行動篇の前篇たりし實驗心理學の開拓を各種の行動の項目の下にその研究方法結果を詳述す。學校軍隊工場管理者にも要必讀。

廣島文理科大学教授 文學博士ドクトル 久保良英先生著	廣島文理科大学教授 文學博士ドクトル 久保良英先生著	廣島文理科大学教授 文學博士ドクトル 久保良英先生著	東京高等師範學校教授 文學博士 檜崎淺太郎先生著	東京高等師範學校教授 文學博士 檜崎淺太郎先生著	東京高等師範學校教授 文學博士 檜崎淺太郎先生著	東京高等師範學校教授 文學博士 檜崎淺太郎先生著	東京高等師範學校教授 文學博士 檜崎淺太郎先生著	東京高等師範學校教授 文學博士 檜崎淺太郎先生著	東京高等師範學校教授 文學博士 檜崎淺太郎先生著
實驗心理學精義 複雑なる行動篇	智能査定用具	増訂精神分析法	一般素質検査法の試み	一般素質検査法の試み	一般素質検査法の試み	一般素質検査法の試み	一般素質検査法の試み	一般素質検査法の試み	一般素質検査法の試み
新 版	十 版	四 版	四 版	六 版	五 版	五 版	十 版	再 版	十 版
菊判全一冊洋装 紙數七百二十頁 定價金六圓 送料金貳拾七錢	ボール紙型箱入 一組金參圓 送料金拾八錢	四判全二冊洋装 紙數六二〇頁 定價金參圓五錢 送料金拾八錢	菊判全一冊洋装 紙數五〇〇頁 定價金四圓八錢 送料金貳拾七錢	菊判全一冊洋装 紙數六〇〇頁 定價金五圓 送料金貳拾七錢	菊判全一冊洋装 紙數五八〇頁 定價金五圓 送料金拾八錢	菊判全一冊洋装 紙數二四頁 定價金六錢 送料貳錢	四判四倍 紙數三六頁 定價金拾貳錢 送料金貳錢	菊判全一冊洋装 紙數六〇〇頁 定價金五圓 送料金貳拾七錢	菊判全一冊洋装 紙數七〇〇頁 定價金五圓八錢 送料金貳拾七錢
前篇簡單なる行動篇に對して複雑なる行動篇として以後の研究發表報告なるが、質量的交互の説述に依りて最新學說を説く。	兒童研究所紀要の實際的研究唯一の用具、智能の査定が本具に依つて最も手軽に出来る。	精神分析法が教育的重基礎を爲すは最近七八年以來確認せらるる。本書に依つて、現下教育界の大問題「性の教育」も解決闡明せり。	本書は兒童青年の精神を正しく理解して、之を開き、應ずべき教育の根柢を闡明する爲の學的建設なり。	本書は最近小學校生徒男女一千數百名につき嚴密なる素質検査を施して、初めて試られたる我邦唯一の素質検査標準なり。	檜崎博士の選拔法概論は凡百の選拔法著述中の完璧にして、豊富な事、他の追従を許さず、斯界第一の好著。	新入學の兒童學的編制に臨み、一般素質検査用として實費を以て提供す。	學校並官衙工場等に於て智能的素質検査の實施に對して實費を以て提供す。	就學兒童の保健、衛生一般の事例に付て深奥なる學說と豊富な實驗で教育家、校醫諸氏の必讀を要す。	二十三年幾百節に分ち先生十年研究の心血を傾倒せる勞作の心學研究の一大寶典又文學資料として、此上なき参考書である。

廣島文理科大学教授 文學博士ドクトル 久保良英先生著	廣島文理科大学教授 文學博士ドクトル 久保良英先生著	廣島文理科大学教授 文學博士ドクトル 久保良英先生著	東京高等師範學校教授 文學博士 檜崎淺太郎先生著	東京高等師範學校教授 文學博士 檜崎淺太郎先生著	東京高等師範學校教授 文學博士 檜崎淺太郎先生著	東京高等師範學校教授 文學博士 檜崎淺太郎先生著	東京高等師範學校教授 文學博士 檜崎淺太郎先生著	東京高等師範學校教授 文學博士 檜崎淺太郎先生著	東京高等師範學校教授 文學博士 檜崎淺太郎先生著
實驗心理學精義 複雑なる行動篇	智能査定用具	増訂精神分析法	一般素質検査法の試み	一般素質検査法の試み	一般素質検査法の試み	一般素質検査法の試み	一般素質検査法の試み	一般素質検査法の試み	一般素質検査法の試み
新 版	十 版	四 版	四 版	六 版	五 版	五 版	十 版	再 版	十 版
菊判全一冊洋装 紙數七百二十頁 定價金六圓 送料金貳拾七錢	ボール紙型箱入 一組金參圓 送料金拾八錢	四判全二冊洋装 紙數六二〇頁 定價金參圓五錢 送料金拾八錢	菊判全一冊洋装 紙數五〇〇頁 定價金四圓八錢 送料金貳拾七錢	菊判全一冊洋装 紙數六〇〇頁 定價金五圓 送料金貳拾七錢	菊判全一冊洋装 紙數五八〇頁 定價金五圓 送料金拾八錢	菊判全一冊洋装 紙數二四頁 定價金六錢 送料貳錢	四判四倍 紙數三六頁 定價金拾貳錢 送料金貳錢	菊判全一冊洋装 紙數六〇〇頁 定價金五圓 送料金貳拾七錢	菊判全一冊洋装 紙數七〇〇頁 定價金五圓八錢 送料金貳拾七錢
前篇簡單なる行動篇に對して複雑なる行動篇として以後の研究發表報告なるが、質量的交互の説述に依りて最新學說を説く。	兒童研究所紀要の實際的研究唯一の用具、智能の査定が本具に依つて最も手軽に出来る。	精神分析法が教育的重基礎を爲すは最近七八年以來確認せらるる。本書に依つて、現下教育界の大問題「性の教育」も解決闡明せり。	本書は兒童青年の精神を正しく理解して、之を開き、應ずべき教育の根柢を闡明する爲の學的建設なり。	本書は最近小學校生徒男女一千數百名につき嚴密なる素質検査を施して、初めて試られたる我邦唯一の素質検査標準なり。	檜崎博士の選拔法概論は凡百の選拔法著述中の完璧にして、豊富な事、他の追従を許さず、斯界第一の好著。	新入學の兒童學的編制に臨み、一般素質検査用として實費を以て提供す。	學校並官衙工場等に於て智能的素質検査の實施に對して實費を以て提供す。	就學兒童の保健、衛生一般の事例に付て深奥なる學說と豊富な實驗で教育家、校醫諸氏の必讀を要す。	二十三年幾百節に分ち先生十年研究の心血を傾倒せる勞作の心學研究の一大寶典又文學資料として、此上なき参考書である。

文學士
上野陽一先生著
學校兒童精神検査法指針
四六判全一冊洋裝
紙數二四〇頁
定價金貳圓七拾錢
送料金拾八錢
學校兒童の精神能力の發達の程度を測定するの方法を示し、知力の程度の診断法を説き、其の結果の始末仕方を敘明して居る。

文學士
寺田精一先生著
兒童の惡癖
四六判全一冊洋裝
紙數五〇〇頁
定價金參圓五拾錢
送料金拾八錢
兒童の惡癖の性質原因の研究と其の矯正法の心理學的の概念である簡明の説述で實際的兒童教育の良書である。

東京帝國大學教授
文學士
青木誠四郎先生著
劣等兒童心理と其教育
四六判全一冊洋裝
紙數六〇〇頁
定價金參圓八拾錢
送料金拾八錢
本書は心理學的及生理學的の實驗研究その取挿入を教育の方法等々を挿入して、懇切丁寧の詳述せるもので好評々々。

東京帝國大學教授
文學士
青木誠四郎先生著
兒童心理學序説
四六判全一冊洋裝
紙數二六〇頁
定價金貳圓三拾錢
送料金拾八錢
著者は兒童心理學の權威に知識の敘説に止まらず、兒童研究の方法を説いて其の諸問題の秘鍵を釋明す。

東京帝國大學教授
文學士
青木誠四郎先生著
保育學校實際研究
ナースリースクール
再版
菊判全一冊洋裝
紙數七〇頁
定價金八拾錢
送料金六錢
這般保育に於て、實際研究せる所産にして、諸氏に當る教師保母の教育に於ては、最良の良書なり、兒童研究家の奨む。

廣島文理科大學教授
文學博士
久保良英先生主幹
青木誠四郎先生主幹
幼兒之研究 第一輯
新
菊判全一冊洋裝
紙數一三〇頁
定價金壹圓二拾錢
送料金拾八錢
低學年幼稚園教育に就て久保、長田、黒瀬、青木、川上、ビケット、ホールドウイン氏等斯界權威者の研究を輯む。

文學士
福富一郎先生著
メンタルテストの原理
再版
菊判全一冊洋裝
紙數五〇〇頁
定價四圓五拾錢
送料金拾八錢
メンタルテストの理論及び實際に於る眞摯な研究の結果にして、最も親切の解釋を基本的科學的の解釋を提し得る好意なり。

佐藤良一郎先生著
教育的統計法概要
新
菊判全一冊洋裝
紙數四五〇頁
定價金參圓
送料金拾八錢
本書は初等數學の智識を以て理解出来る系統立てられた教育的精神測定統計學唯一の精典で、橋崎博士は推獎す。

東京高等師範學校教授
文學博士
橋崎淺太郎先生著
心理學概論 第一卷
新
菊判全一冊洋裝
紙數二六〇頁
定價金貳圓八拾錢
送料金拾八錢
本書は橋崎博士が學的生活二十幾年の研究の收穫とも謂ふべき物にして、独自の發表を多數含まる、好著なり。

滿洲教育專門學校教授
文學士
朝日直樹先生著
行動主義心理學
新
四六判全一冊洋裝
紙數四百四十頁
定價金參圓
送料金拾八錢
ロバート、エス、ワッド、ブ、メンタルライフを解するものにして、行動主義心理學を説く。



<p>東京高等師範學校教授 文學博士ドクトル 檜崎淺太郎先生著</p>	<p>廣島文理科大學教授 文學博士ドクトル 久保良英先生著</p>	<p>廣島文理科大學教授 文學博士ドクトル 久保良英先生考案</p>	<p>廣島文理科大學教授 文學博士ドクトル 久保良英先生著</p>
<p>學校選擇 職業指導 兒童素質検査法</p>	<p>愛兒良毅の教養</p>	<p>團體的智能検査用紙 BA式</p>	<p>現代心理 叢書 形態心理學</p>
<p>新版</p>	<p>新版</p>	<p>新案</p>	<p>新版</p>
<p>菊判全一冊洋裝 紙數二百十八頁 定價金貳圓參拾錢 送料金拾八錢</p>	<p>四六判全一冊洋裝 定價金壹圓五拾錢 送料金拾八錢</p>	<p>大判全二冊 定價各冊參錢</p>	<p>菊判全一冊洋裝 紙數四百頁 插圖五十餘 定價參圓五拾錢 送料金拾八錢</p>
<p>入學試驗廢止に伴ふ兒童素質検査の方法としての標準を示し併せて小學卒業生の進むべき學校選擇と職業指導の基準を現はす。</p>	<p>本書の全文は之悉く眞摯なる學者の、愛と學とより見たる兒童教養實驗記録である。</p>	<p>本用紙は久保先生の考案になる兒童智能検査用紙團體的用の。</p>	<p>ヴントやセームスの如き心理學の建設されたる大體を根柢から覆し全く異つた見地から精神現象を見直はす。</p>

612
46

